新資料 Vādhūla-Anvākhyāna の伝える「Purūravas と Urvaśī」物語

後 藤 敏 文

2004年3月発行
神子上恵生教授頌寿記念論集
インド哲学佛教思想論集抜刷

845

新資料 Vādhūla-Anvākhyāna の伝える「Purūravas と Urvaśī」物語

後藤敏文

Purūravas と Urvaśī の物語は，R̥gveda をはじめ，複数の Veda 文献の伝承によって知られている。[1] 井狩は1992年以来，黒 Yajur-Veda の一 Śākhā Taittirīya 派に属する Sūtra 段階での一分派，Vādhūla 派の写本を調査収集し，精密な研究を重ねているが，聖典「Brāhmaṇa」として編集されなかった一種の brāhmaṇa 伝承を主な内容とする Śrautasūtra-Anvākhyāna[2] を収めた重要写本の発見に成功し，その最初の部分を公表した。[3] 冒頭部分（I 1–2）を飾るのは Purūravas–Urvaśī 物語の未知の伝承であり，内容的にも言語の上でも重要な新知見を齎す重要資料である。筆者は同氏提供の校正刷に基づき，既にドイツ語で翻訳と注解とを試みた。[4] 計画中の日本語による Veda 散文選に他の全伝承と共に詳細を発表する予定であり，ここには邦訳と訳注の主なものを収め，この新資料から得られる主要な新知見を紹介して検討に供したい。解釈に亙る事柄は主として注の中に収めた。原典は Ed. IKARI の本文を再録する。

Vādhūla-(Śrautasūtra-)Anvākhyāna I 1–2

便宜的に§に分割して提示する。⁺は（井狩による写本の，または筆者による Ed. の，何れも軽微な）修正；（ ）内の数字は井狩が推定する欠損音節数。写本で語末の *m* が発音どおり次の語頭の子音と同系列の鼻音として表記される場合（*n*, *ñ*），Ed. IKARI に従い，そのままにした。訳文中の〈 〉は欠損部分，〔 〕は訳文への補い，

846

( )は説明等の補足。

I 1 (I 1,1)

§ 1 …(20) 〔*ya*〕*jñ*〔*e*〕*na devās suvargaṃ lokam āyan. teṣām manuṣyāṇām akḷptena yajñena yajamānānāṃ kusindhāny eva prāvardhanta. nānyāni kāni canāṅgāni. no ha devān havyaṃ prāpa. te devā abruvan. manuṣyā vā akḷptena yajñena yajante. tenainena ta ṛdhv*…(12) *ti. te vāca*…(6) *bruvan. vrajataṃ yuvam. manuṣyebhyo yajñaṃ kalpayatam iti. tau hāgatya manuṣyān ūcatur. āvaṃ vai vo yajñaṃ kalpayiṣyāva iti. teṣāṃ ha manuṣyāṇāṃ priyaṃ babhūva.*

〈…〉〔完全な〕祭式によって神々は天界に行った。[5] 彼ら人間たち(Manuṣの子孫たち)は整っていない祭式によって祭式を行っていたので，彼らの胴体だけが成長した。他のどの身体部位も〔成長し〕なかった。供物(献供されるべき物)が神々の下へ到着することもなかった。彼ら神々は言った:「人間たちは整っていない祭式によって祭式を行っているのだ。そのような当のものによって彼らは〈…〉」と。彼ら(神々)はことば〈と思考とに〉言った:「(我々の世界から出て)歩み行け(*vrajatam*)，君ら(両者)は。人間たちの為に祭式を整えよ」と。両者はやって来て人間たちに言った:「私たちは君たちの祭式を整えることになろう」と。彼ら人間たちの一員たる資格を〔思考は〕得た(*teṣāṃ ha manuṣyāṇāṃ priyaṃ babhūva*, → **2. 4.**)。

§ 2 *tan mano vācaṃ prāviśat. tato manur ajāyata. sā vāṅ manuṃ prāviśat. tata iḍā mānavy ajāyata. sa manur iḍāṃ prāviśat. tataḥ purūravā aiḍo 'jāyata. seḍā pu*〔*rūravasaṃ*〕 *prāviśat. tata urvaśy ajāyata. manuṣyā ha purūravasaṃ rājānam akurvata. gandharvā horvaśīn duhitaram akurvata.*

そこで (*sa*) 思考はことば (*vāc-*) に入り込んだ。それから Manu が生まれた。そのことばは Manu に入り込んだ。それから Manu の娘 Iḍā が生まれた。その Manu は Iḍā に入り込んだ。それから Iḍā の子 Purūravas が生まれた。その Iḍā は Purūravas に入り込んだ。それから Urvaśī が生まれた。[6] 人間たちは Purūravas を〔自分たちの〕王にした。Gandharva たちは Urvaśī を〔自分たちの〕娘にした。[7]

§ 3　*tau tathā manuṣyebhyo yajñam icchantau ceratus. sa ha purūravā mr̥gayāñ carann apsaraso 'dhijagāma. tāsāṃ horvaśīm evābhidadhyau. tāñ jāyāñ cakre. sā garbhan dadhe. taṃ paraivāsa. sā dvitīyan dadhe. taṃ paraivāsa.* 〔*sā tr̥tī*〕*yan dadhe. taṃ paraivāsa. sā caturthan dadhe. sā hovāc$_a$. -āyam ubhayeṣān devamanuṣyāṇām annādo bhaviṣyati. pitr̥ṣv imañ janayānīti. sā horvaśī pitr̥̄n vijanitum iyāya. tasmād utaitat strī pitr̥̄n vijanitum iyād. etām evānu devavihitim. īśvaro hānnādo bhavitor yan tatra janayati. sā horvaśī pumāṃsañ janayāñ cakāra. tasya hāyur iti nāma dadhus. tan nu haitad āyur āyur iti caranty. āyuṣmān asīttham asīti.*

両者（PとU）はそのような次第で人間たちの為に祭式を求めてさまよった[8]。その Purūravas は狩猟をしていて，Apsaras たちに出くわした。彼女たちの中，ほかならぬ Urvaśī に思いを寄せた[9]。彼女を〔自分の〕妻にした。彼女は胎児を〔自分の中に〕置いた（身ごもった)。それを〔彼女は〕（生まれると）捨ててしまった[10]。彼女は第二の胎児を身ごもった。それを〔彼女は〕（生まれると）捨ててしまった。彼女は第三の胎児を身ごもった。それを〔彼女は〕（生まれると）捨ててしまった。彼女は第四の胎児を身ごもった。彼女は言った：「この者は神々・人間たちの両方の食べ物を食べる者[11] となるであろう。親たちのもとでこの者を生んでやろう」と。そこで Urvaśī は親たちの

もとへお産をする為に (*vijanitum*, → **1. 5.**) 行った。[12] それ故，現にまた (今日も：*utaitat*)，女は親たちのもとへお産をする為に行ってかまわない (行くことがある)。まさにこの神々の定めに従って[13]。そこ (親元，実家) で〔女が〕産む者 (男児) は，食物を食べる者となれる[14]。その〔ようにして〕Urvaśī は男児を産んだ。〔Gandharva たちは〕Āyu と彼の名を定めた[15]。そこで，今現に，寿命・生命 (*āyuṣ-*) を *āyuṣ-* と〔呼んで〕〔ひとびとは〕過ごしている訳である[16]，「君 (あなた) は *āyuṣ-* (若さ，寿命〔?〕) のある方だ。君はこれこれの人だ」[17] といって。

§ **4** *sa ha purūravā āvavrāja. putram ānayiṣyāmi. jāyām u ceti. tāṃ hāgatyovāca. vi vā ajaniṣṭhā. yāca pitṝñ kiñ cit kam iti. sā horvaśī pitṝn yayāc*$_a$*. -aiṣāṃ ha devānāṃ priyaṃ babhūva. sādhu yan manuṣyānām ev*$_a$*. -ānu devavihitin.* (*tasyai ha gandharvā varan daduḥ.*)[18] 〔end mark〕

その (そこで) Purūravas は (Uの親元へ人間たちの世界から) 歩んで来た (*ha... āvavrāja*)，「息子を連れて来ることになろう。また，妻をも」と〔考えて〕。彼女のもとへやって来て言った：「君はお産をしたのだ (*vi vā ajaniṣṭhās*, → **1. 5.**)。親たちに何か幸運 (祝福：*kam*) を求めよ」と。そこで (*sā*) Urvaśī は親たちに求めた。―― 〔Āyu は〕これら神々の一員たる資格を得た (*eṣāṃ ha devānāṃ priyaṃ babhūva*)。ほかならぬ人間たちの〔一員であること〕は当然である (*sādhu-*: 正しい，相応しい)。神々の定めに従って。[19]

I 2 (I 1, 2)

§ **5** *tasyai=dadus* 〔: *tasyai ha gandharvā varan dadus*〕. *sā hovāca. yajñaṃ vṛṇa iti. te hāpratyucya devānām ardham uddudruvus. tān*

hocur. devā duhitre vai vijātāyai va…(15+18) *yajño gamiṣyati netvā asmattanād iva iti. tān hocur. na khalu yuṣmabhyam āśrāvayān. na vaṣaṭkaravān*[20]. *darvihoma eva yuṣmākaṃ. pra hi yūyaṃ yajñam adāteti. tasmād gandharvebhyo nāśrāvayanti. na vaṣaṭkurvanti. darvihoma eva teṣāṃ. pra hi te yajñam ayacchan.*

彼女に Gandharva たちは望みのもの（*vara-*）を与えた（取らせた)。彼女は言った：「〔私は〕祭式を選ぶ」と。彼らは答えずに神々の〔いる〕場所（*ardha-*）に走り上った。彼らに〔Gたちは〕言った：「神々よ，お産をした（*vijātā-*, → **1. 5.**）娘の為に，〈望みのものを…。…〉祭式が，丁度我々の子孫から〔出て〕行くことなく，（我々のもとから人間たちのもとへ）行くことになるであろう（そのようにしてくれ〔？〕)」と。彼らに〔神々は〕言った：「君たちの為には，当然〔Adhvaryu 祭官たちは〕（Agnīdh 祭官に）*śrauṣaṭ*〔を言えという〕指示を出さないように。*vaṣaṭ* の発語を〔祭官たちは〕しないように。Darvihoma[21] だけが君たちにはある（に属する)。君たちは祭式を与えてしまったから」[22] と。それ故，Gandharva たちの為に，〔祭官たちは〕*śrauṣaṭ* の指示を出さない。*vaṣaṭ* を発語しない。Darvihoma だけが彼らにはある。彼らは祭式を与えてしまったから（→ 注22)。

§ 6 *sa ha purūravāḥ putram evetarasmin haste cakre, yajñam itarasmiṁs. tābhyān tathā vavrāja* (→ 注23). *tābhyām ubhābhyāṃ saha grāman nābhyavājigāṃsat. so 'raṇye yajñan nidhāya putreṇa saha grāmam abhyaveyāya. tam madhye grāmasya nidhāya yajñasyārdham āvavrāja. tam anyathārūpam ivāntarhitam ājagāma.*

その（そこで）Purūravas は，ほかならぬ息子を一方の手にした，祭式をもう一方の手に。それら〔両者〕を伴って，そのようにして〔Pは〕（荒野を）

850

歩んだ[23]。その〔両者〕を伴っては，〔彼は〕村落に向かって降りて行きたくなかった（のだ：*abhyavājigāṃsat*, → **1. 1. 1.**)。彼は荒野に祭式を置いて，息子を伴って村落へ向かって降りて行った。彼を村落の中央に置いて〔から〕，祭式のある場所（*ardha-*）へと（荒野を）歩み戻った（*āvavrāja*)。それが，丁度，別様の姿に〔なって〕隠されてしまっているのに出会った（→ **1. 4.**)。

§ **7** *sa ha devānām uddudrāva. tān hovāca. devāḥ putreṇa ca yajñena ca saha grāmam* +*avāvrājiṣan* (K_1 *avavrājiṣan*, K_4 *avaprājiṣan*). *tābhyām ubhābhyāṃ saha grāman nābhyavājigāṃsiṣaṃ. so 'raṇye yajñan nidhāya putreṇa saha grāmam abhyavāgān. tam madhye grāmasya nidhāya yajñasyārdham* +*āvrājiṣan* (K_4 *āvavrājiṣan*, K_1欠). *tam anyathārūpam ivāntarhitam āgamam iti.*

彼は神々の〔いる場所 *ardham*〕に走り上った。彼らに言った：「神々よ，〔私は〕息子と祭式とを伴って村落へと（荒野を）歩み降りたのだ（*avāvrājiṣam*)。その両者を伴っては，村落へ向かって降りて行きたくなかったのだ。そこで（*sa*）〔私は〕荒野に祭式を置いて，息子を伴って村落へ向かって降りて行ったのだ。その〔息子〕を村落の中央に置いて，祭式の〔ある〕場所へと（荒野を）歩み戻ったのだ（*āvrājiṣam*)。それが，丁度，別様の姿に〔なって〕隠されてしまっているのに出会ったのだ（→ **1. 4.**)」と。[24]

§ **8** *kim u tatrāgamad ity. etāny aṣṭau kapālānīti hovāca. sa vāva yajña iti hocuḥ. kim uv*[25] *evānyad ity. etā oṣadhayo 'bhito jātā iti hocus. tad barhis. tāni pavitrāṇi. sa vāva yajñaḥ. kim uv evānyad ity. ete vanaspatayo 'bhito jātā iti hovāca. sa vāva yajña iti hocus. sa idhmas. sa edhas. sa vāva yajñaḥ. kim uv evānyad ity. eṣo 'śvatthaś śamyāṃ rūḍha iti hovāca. sa vāva yajña iti hocus. tat satyam. sā*

yajñiyā tanūs. sa vāva yajñaḥ pratyakṣam iti.

「ならば，そこで何が〔君に〕出会ったのか」と。「これら，8つの皿だ」と〔Pは〕言った。「それが祭式なのだ」と〔神々は〕言った。「何かもっと他には」と〔Pは言った〕。「ここに，一面に，草たちが生えている」と〔神々は〕言った，「それが敷き草だ。それが清めの道具たちだ。それが祭式なのだ。[26] 何かもっと他には」と。「ここに，一面に，木々が生えている」と〔Pは〕言った。「それが祭式なのだ」と〔神々は〕言った，「それが焚き木だ。それが燃料だ。それが祭式なのだ。何かもっと他には」と。「ここに，Aśvattha（インドボダイジュ）[27]が Śamī（マメ科の高木，cf. SYED Diss. 1990, 524–539)の上に成長している」と〔Pは〕言った。「それが祭式なのだ」と〔神々は〕言った，「それが真に実在するものだ[28]。それが祭式に相応しい〔火の〕身体（祭式用の姿）だ。それが目に見える形で祭式なのだ」と。

§ 9 *sa eṣa evam āhṛto yajñaḥ purūravasā manuṣyebhyas. tato vai manuṣyānāṃ kḷptena yajñena yajamānānām aṅgāparūṁṣy aṅguliparūṃṣi prāvardhanta. yathemāni puruṣasyāṅgāparūṁṣy aṃguliparūṃṣi pravardhanta evan. tasmān nu horvaśy asīity evāraṇim ādadīta. purūravā ity u=yur*[*)] *asīti jātam abhimantrayate. sa vā eṣa āyuḥ paurūravasa ubhayeṣān devamanuṣyāṇām annādo 'gnir*[+] *devabhagavān* （→注33). *ubhayeṣāṃ ha vai devamanuṣyāṇām annādo bhavati, ya evaṃ vidvān agnīn ādhatte, yasya vaivaṃ vidvān agnīn ādadhāti.*

[*)] 省略部分は Vādhūla-Śrautasūta I 1, 3, 10–14 に相当（ローマン体は mantra，太字は Anvākh にある，または相当する文字）：[29]

*prokṣy*āgner janitram asī*ti śakalam* ***ādatte.*** vṛṣaṇau stha *iti vṛṣāṇāv.* **uvrvaśy** **asī*ty aranim.*** **purūravā** ***ity u-***

852

ttarāraṇiṃ. ghṛtenākta *ity anakti.* vṛṣaṇan dadhāthām *ity avadadhāti.* gāyatrañ chando 'nu prajāyasve*ti chandobhir ātmānam abhi nivartayate.* traiṣṭubhañ chando 'nu prajāyasva jāgatañ chando 'nu prajāyasve*ti.* *daśahotāram araṇyor vyācaṣṭe.* *manthanty agnim.* ā-

yur asī*ti jātam abhimantrayate.*

かくて（*sa*「そのようなものとして」）この（現にある）祭式がこのようにして齎された，Purūravas によって人間たちの為に。それ以来，整った祭式によって人間たちは祭式を行っていたので，〔彼らの〕手脚の関節たちが[30]，指の関節たちが成長したのだ。丁度（現に）人の，この手脚の関節たち，指の関節たちが成長する，そのように。それ故，今，まさしく《君は Urvaśī だ》と〔唱えながら〕火鑽り台を手に取るべきなのである（*nu ha*, → 注16)。《〔君は〕Purūravas だ》と

（補：）〔唱えながら〕火鑽り棒を。《君たちはバターオイルによって塗られた》と〔唱えながら両者にバターオイルを〕塗る。《種牛を君たちは創れ》と〔唱えながら〕はめる。《gāyatrī の韻律に従って子孫をつくれ》と，韻律たち〔を文中に含む mantra〕によって，自分の方へ向きをかえさせる，《triṣṭubh の韻律に従って子孫をつくれ》《jagatī の韻律に従って子孫をつくれ》と。[31] 両火鑽り木（台と棒）の（に対して）『10人の Hotṛ』を唱える[32]。火を鑽る。《君は Ā-

yu》だと生まれた〔火に〕mantra を唱えかける。それ（その様にして生まれた火）がこの Purūravas の子 Āyu，神々と人間たちの両方の食物を食べる（→注11)，神々の分配を持つ火なのだ[33]。このように知りつつ〔自分の〕祭火たちを設置する者は，あるいは，このように知っている者が（祭官として）その者の祭火たちを設置〔してやる〕場合には〔その者は〕，つまり（*ha* → 注16）神々と人間たちの両方の食物を食べる者となるのだ。

§ **10** *tad āhur. yāṁs tāṁs* +*turīyāt pūrvān*+ (Ed. *turīyapūrvān*) *garbhān adhatta katama eta iti. sūtakāgnir eva teṣāṃ prathamo. yena mṛtan dahanti sa dvitīyo. yenaivaitat striya upasthaṃ* +*kalpayante* (Ed., Ms. *kalpante*) *sa tṛtīya. etān ha vāvaitad brāhmaṇam adhivadaty agnes trayo jyāyāṃso=prāmīyantety**). *ete ha vāva te.* 〔end mark〕

*) *agnés tráyo jyā́yāṁso bhrā́tara āsan. té devébhyo havyáṃ váhantaḥ prā́mīyanta* TS II 6, 6, 1 (cf. IKARI Ed. 同所 n. 100)。

それについて〔Brahmavādin たちは〕言う:「〔Uが〕例の第四の〔胎児〕に先立つ胎児たちとして身ごもったそれらは，どの〔三つ〕か」と。ほかならぬ産褥の火がそれらの中の最初の〔胎児〕である。それによって〔人々が〕死者を焼く〔火〕，それが第二の〔胎児〕である。それによって現に女たちが〔自分の〕腹（子宮）を（受胎の為に）整える〔火〕，それが第三の〔胎児〕である。これら〔の火〕[34] に次の brāhmaṇa (TS II 6, 6, 1) は論及しているのである:「Agni には年長の三兄弟があった。彼らは神々へ〔献ぜられた〕供物を運んでいる時，破滅した」と。それはこの〔三兄弟〕なのである。

1. 言語について

1. 1. Perfekt と Imperfekt

地の文は Imperfekt と Perfekt とから成っており，物語の中核部分は Perf. によって語られている。より古い Veda 散文では語りの「テンス」は Ipf. であった。会話文中は全て Aor. であるが (→ **1. 2.**)，これは基本的には新古を問わず Veda 散文一般に該当する。[35] Perf. を語りの基本とする文体 (cf. *itihāsá-*

「であったとさ」）は Veda 散文新層の一指標とされる。[36] この言語段階では，過去を表わす3時制の中 Ipf. が物語の筋を担う機能から解放され，その使用意図を一層明確にできるようになっていた。従って，Perf.–Ipf. 混交体の問題は，語り中の Ipf. の使用原理の解明に帰する。本 Text における地の文の動詞形を列挙すると次のようになる：

§1 **Ipf.** *āyan*（神々，Śruti に基づく），*prāvardhanta*（人間たちの身体部位）；**Perf.** *ha...prāpa*（神々への献供，→**1.1.2.**）；**Ipf.** *abruvan*（神々）；**Perf.** *ūcatur*（Manas と Vāc），*ha...babhūva*（Manas）.

§2 **Ipf.** のみ： *prāviśat*, *ajāyata* 各4回（Manas, Vāc, Manu, Iḍā, P, U）；*akurvata*（人間たちと Gandharva たち）.

§3 **Perf.** のみ： *ceratur*, *ha...adhijagāma*, *abhidadhyau*, *cakre*, *dadhe* 4回，*parā...āsa* 3回，*uvāca*, *ha...iyāya*, *ha...janayāṃ cakāra*（以上PとU）；*ha...dadhur*（Gandharva たち）.

§4 **Perf.** のみ： *ha...āvavrāja*, *ha...uvāca*, *ha...yayāca*（以上PとU）；*ha...babhūva*（Āyu, →**1.1.2.**）.

§5 **Perf.** *ha...dadur*, *hovāca*, *ha...uddudruvur*, *hocur*（Uと Gandharva たち）；*hocur*（神々）；**Ipf.** *pra...ayacchan*（Gandharva たち）.

§6 **Perf.** *ha...cakre*, *vavrāja*, **Ipf.** *abhyavājigāṃsat*（→**1.1.1.**），**Perf.** *abhyaveyāya āvavrāja*, *ājagāma*（全てP）.

§7 **Perf.** のみ： *ha...uddudrāva*, *hovāca*（P）.

§8 **Perf.** のみ： *hovāca* 3回，*hocur* 4回（Pと神々）.

§9 **Ipf.**： *prāvardhanta*（人間たちの身体部位）.

§10 **Ipf.**： *adhatta*（神学論議），*prāmīyanta*（Śruti の引用）.

ここに見られる Ipf. と Perf. の使用法を分析すると，これまで明確でなかった Ipf.–Perf. 混成からなる文体の解明に新たな視点が得られる。[37] この物語における両動詞語幹の使用原則は，即ち，語り手である祭式学者（*brahmavādín-* たち）が自己の学説，解釈，解説などを提示し，差し挟むのに（古風な）Ipf. を用いた，ということの中に求められる：物語り全体は事実上 §1 *prāvardhanta*「成長した」（Ipf.）で始まり §9 の *prāvardhanta* で終わ

る。§ 10 *tad āhur... adhatta* は神学論議中に用いられている。§ 5 *pra... ayacchan* は語り手の解説（理由の説明）である。§ 2 の一連の Ipf. は発生過程の「新学説」を提示するのに用いられ，§ 1 から始まり以下で本格的に語られる Perf. による物語の導入部として機能している（次節 § 3 冒頭の *tathā*「そのような次第で」に注目されたい）。

1. 1. 1.　§ 6 の Perf. による語りの中に現れる Ipf. *nābhyavājigāṃsat*「降りて行きたくなかった」（Desid., 否定文）はこの点で意味深長である：*tābhyām ubhābhyāṃ saha grāman nābhyavājigāṃsat*「その〔両者〕を伴っては，〔彼は〕村落に向かって降りて行きたくなかった」（語順〔更に *saha* による強調を伴う〕によって部分否定を表している）。問題の鍵は語形が Desiderativ（願望語幹）であるという点に求められる。即ち，「降りて行きたくなかった」は Purūravas の気持であり，物語の語り手はそれを叙述することも（：Perf.[38]），語り手の解説として語ることもできる。ここでは，語り手がPの気持を解説したものと理解すれば整合性が得られ，伝承の正確さが改めて注目される。

1. 1. 2.　Perfekt が単なる語りの語形としてではなく，語り手の解説中に本来の機能（この場合には，過去の行為・動作が齎した現在の状態：resultativ）で用いられているとも解釈可能な例が 2 箇所に見られる：§ 1 *no ha devān havyaṃ prāpa*「供物（献供されるべき物）が神々のもとへ到着することもなかった」，§ 4 *eṣāṃ ha devānāṃ priyaṃ babhūva*「〔Āyu は〕これら神々の一員たる資格を得た（→ **2. 4.**）」。この場合，Perf. で語られる文体では，Perf. の動詞形に語りの筋を担う役割と Perf. 固有の機能とが重ねられていることになる。従って，その境界は常に明確ではなく，解釈上の判断に委ねられる。

1.2. Suppletion など

1.1. の冒頭に触れたように，会話文中の過去は全て Aor. で述べられている。古・中期インドアーリヤ語の文献は基本的に同じ語彙を繰り返すスタイルをもつことから,[39] 前後の対応する文を対照させることにより，同一の動詞語彙に属する活用・派生の総体が確認できる。この物語に於いては，§6 の語りと §7 の Purūravas のことばが対比される：*vavrāja* :: ⁺*ava-(ā-)avrājiṣam*, Desid. Ipf. *abhyava-ajigāṃsat* (→**1.1.1.**) :: Desid. Aor. *abhyava-ajigāṃsiṣam*, *abhyava-iyāya* :: *abhyava-agām*, *ā-vavrāja* :: ⁺*ā-avrājiṣam*, *ā-jagāma* :: *ā-agamam* (cf. §8 冒頭の Aor. 3. Sg. *ā-agamat*)。これから複数の動詞語根にまたがる補完現象（Suppletivismus, Suppletion）が確認できる[40]: Perf. *-iyāya* (語根 *ay/i*) に対して，Aor. 1. Sg. は *-agām* (語根 *gā*), Desid. は *-jigāṃsa-* (その Aor. は *ajigāṃsiṣam*：何れも語根 *gam*) である。語根 *gam* は独自に Perf. *-jagāma* と Aor. 1. Sg. *-agamam*, 3. Sg. *-agamat* とをもっている。――§5 には会話文中の Aor. 2. Pl. *pra*... *adāta* と解説文中の Ipf. *pra*... *ayacchan* との間に補完現象が見られる，さらに同節冒頭の Perf. *varan dadur* 参照。[41] *pra* が定動詞から離れているのは前接辞（前置詞，副詞）の独立性が強かった古い言語層に多い tmesis の現象である。この物語における tmesis の現れ方は Brāhmaṇa から Śrautasūtra 古層へかけて一般的に見られる Veda 語新層のそれであり，特筆すべきものはない。

1.3. Futur と Konjunktiv

Konjunktiv (subjunctive, 接続法) は本来，未来を表わす機能 (prospektiv) と（話し手の）意志を表わす機能 (voluntativ) とを有していたが，Veda 散文では専ら後者の機能が生きていた。[42] この機能の一部は叙事詩や古典期の一人称 Imperativ の中に痕跡を止めている。他方，Futur (future, 未来語幹) は未来を表わす動詞語幹（特殊な現在語幹の一つ）であるが，古い段階では行為主体の意図を表わす用例も多い。この物語の中では Fut. と Konj. との使い分け

が特に明瞭である。即ち，Fut. は（話し手または行為主体の）意志を超えた未来に関する推測，予言，運命を，Konj. は意志（話し手の意志による未来の決定）を表わす場合に用いられている：§ 1 *āvaṃ vai vo yajñaṃ kalpayiṣyāva*「私たち両名は君たちの祭式を整えることになろう」（Fut.）；§ 3 *ayam ubhayeṣān devamanuṣyāṇām annādo bhaviṣyati. pitr̥ṣv imañ janayāni*「この者は神々・人間たちの両方の食べ物を食べる者となるであろう（Fut.)。親たちのもとでこの者を生んでやろう（Konj.：1人称〔主語＝話者〕の意志)」；§ 4 *putram ānayiṣyāmi. jāyām u ca*「息子を連れて来ることになろう。また，妻をも」（Fut.，この解釈が齎す意義については→**2. 1.**）；§ 5 *. . . yajño gamiṣyati netvā asmattanād iva*「祭式が，丁度我々の子孫から〔出て〕行くことなく，（我々のもとから人間たちのもとへ）行くことになるであろう」（Fut.)，*na khalu yuṣmabhyam āśrāvayān. na vaṣaṭkaravān*「君たちの為には，当然〔祭官たちは〕（Agnīdh 祭官に）*śrauṣaṭ*〔を言えという〕指示を出さないように。*vaṣaṭ* の発語を〔祭官たちは〕しないように」（Konj. 3人称：話者〔神々〕の指令)。**2. 3.** に引いた MS, KS の例をも参照。

1. 4.　*éd* + Akkusativ

Purūravas–Urvaśī 物語の各ヴァージョンや Bhr̥gu の物語などに現れる *éd*+Akk. の構文は黒 YV 散文以降見られ，「何と，驚いたことに…があった・であった」と訳されて来た。用例と文献については E. Tichy “Vedisch *éd*”, Verba et strukturae, Fs. Strunk (1995) 319–343 に詳しい。§ 6 および § 7 の末尾の文は，この構文が「*ā́*+*íd*. . . 移動の定動詞（*i, gam*)」という文から，移動の定動詞の省略により成立したものであることを示唆している：*tam anyathārūpam ivāntarhitam ājagāma/āgamam*「それが，丁度，別様の姿に〔なって〕隠されてしまっているのに出会った・〔私は〕出会ったのだ」。注27に引いた KS VIII 10 の例をも参照されたい。

858

1. 5. ***vi-jan^i^***

*vi-jan^i^* は「(女が) お産をする, 分娩する (entbinden)」の意味で用いられ (facientiv-intransitiv), *jan^i^*「〔男が子を〕作る」(Simplex など)[43] とは異なった現在語幹をもつ: Präs. *vi-jā́yate* (WACKERNAGEL bei OERTEL Syntax of the Cases 328: TS V, 5, 1,7^p^, CALAND Kl. Schr. 538: Vādh-Anvākh IV 118, n. 6 = Ed. IKARI V 27,1[44]); cf. pāli *vi-jāyati*。この物語からはこれに属する複数の語形が収集される : VAdj. *vijātā-*「お産をした〔女〕, entbunden」(§ 5, cf. pāli *vijātā-*), Inf. *vijanitum* (§ 3), Aor. *vi vā ajaniṣṭhās* (§ 4)。

2. 内容, 語彙, 文化史的ことがらなど

2. 1. 妻の親元・実家での出産と名付け (§ 3) は母権的性格を示す。「Pitṛ たち」とは, 文脈上からも Urvaśī の「実家の親たち」, つまり Gandharva たちのことであるが, Pitṛ は「祖霊たち」一般をも意味し, 祖霊即ち Gandharva という当然の諒解が下敷きになっている。つまり, 彼らは死後上方の世界に生まれ変わっている祖先たちである。Gandharva が祖霊たちであることは, この物語では § 5 に明瞭である, → 注21。[45] 実家 (さと) に帰ってお産をすることと, 母方の親たちが名付け親となることとは, 共に母権的性格を示している。ヴェーダ文献では異例であるが, このような事例は, そもそもアーリヤの正統文献の表層には現れ難かったであろう。Purūravas と Urvaśī の物語の背景には, Ṛgveda 以来元々, ārya 的父権制とインドの地で出会った母権的社会制度との宥和の主題が隠されている可能性がある。Āyu は人間たちの王 Purūravas の息子として, 当然父の種族, 即ち人間たちの一員であるが, 母 Urvaśī の親 Gandharva たちのもとで生まれた為, 神々の一員ともなった (→ 注19。Gandharva たちは上界の住人として, 地上の人間たちとの対比では広義の神々の一員とみなされる)。Śunaḥśepa の物語 (AB VII 14, 7〜

ŚāṅkhŚrŚū XV 20）で婆羅門の母親が末子を手許に置こうとする動機も母権制に求められるであろう（父親は長子を手許に置く。手放される Śunaḥśepa は3兄弟中の次男である）。§4 で Purūravas が *putram ānayiṣyāmi. jāyām u ca*「息子を連れて来ることになろう。また，妻をも」と言っていることは注目される。Konjunktiv を用いて「連れてこよう」と言わず，本人の意思に関わらない場合に用いる Futur 語形（→**1.3.**）で語るということは，実現が Purūravas 自身の意志を越えている，あるいは少なくともそのような要素を含むことを暗示する[46]。この物語で使用される動詞語形の厳密さから判断して，背景に妻子を実家の親元にとどめておく結婚形態（妻問婚）の存在[47]を推定し，父系（父権）と母系の家族制度が並存していた社会状態の反映を見ることが妥当であろう。

2.2. §7 の冒頭部は，下から上へと順次，人間たちの村落（*grāma-*）—Gandharva たちの世界（Pitṛloka）—神々の世界（*suvarga- loka-*, Devaloka）があることを示している。前二者の中間に *araṇya-*「原野」（人の生活・文明領域外の原野，森林，荒野など；→注48）が介在する。動詞 *vraj* は Loka「生活圏」から出て，Araṇya を過ぎって移動する場合に用いられている。他の文献における *pra-vraj*「出家する」，*pari-vraj*「遊行遍歴する」の用例にもこの意味要素が想定され，今後精査すべき課題として提起される。

2.3. *devāḥ* は Manuṣ の子孫（*manuṣya-*）ではない別種族で，完全な祭式によって天界に達し，「天に属する者たち」（*devá-* の原義に当たる）即ち「神々」となっていると解釈できる。同じく Agnyādheya に関説する Manu と Iḍā（Purūravas の母）の物語にも同様の趣旨が伺われる：MSᵖ I 6, 13:107, 5–12 *devā́ vā́ imé puṇyamanyā́ agním ā́dadhate. ... sakṛ́d vā́va devā́ḥ sárveṇa sākáṁ svargáṃ lokàṁ samā́rukṣann. itáḥpradānāt tú yajñám úpajīviṣyanti*「ここ（地上）にいる神々は自らを善なる者（祭式の有資格者）

と考えて〔自分たちの〕祭火を設置している。… 一時に神々は一切を伴って天界へすっかり上ってしまったのだ。しかし，ここ（地上）からの贈与に基づいて，彼らは祭式を糧として生きてゆくことになろう（Fut.:予言)」――神々は一族を挙げて天界に上ってしまい，地上に子孫を持たない。Manuṣya たちは地上に子孫を残し，死者だけが天界・祖霊界に行く。食物等の生産は地上でのみ行われ，天界の住人たちは祭式を通じて糧を送り届け〔させ〕ねばならない――; KSᵖ VIII 4:2, 10（Iḍā の言）*tathā te 'gnim ādadhāsyāmi yathā manuṣyā devān upa prajaniṣyante*「Manuṣ の子孫たちが，神々のもとへと，子孫を残して〔送り続けて〕行くことになる（Fut.: 予言）ように，そのように私は君（Manu）の祭火を設置することになろう（Fut.: 予言)」; さらに，TSᵖ III 2, 9, 7など。本物語を貫く主題は，結局，祭式を巡る思弁の展開の中で神々にとっての生命線の位置に置かれるに至った，地上における祭式の確保（祭火が地上に存在することの必要性）を巡る，神々の企みと言える（→ 注 5）。

2. 4. *priyaṃ bhū*「ある部族に一員として迎え入れられる資格を獲得する」の表現は注目に値する。問題の文は *teṣāṃ ha manuṣyāṇāṃ priyaṃ babhūva*（§ 1末）と *eṣāṃ ha devānāṃ priyaṃ babhūva*（§ 4末）とである。§ 1 では主語は中性単数 *manas-* であり，一見「思考はこれら人間たちにとって好ましいものとなった」とも解釈できる。しかし，§ 4 では主語は Āyu と考えられる。§ 3 で「この者は神々・人間たちの両方の食べ物を食べる者となるだろう」と言われた中身が，ここに述べられる「神々の *priya-*」，「人間たちの〔*priya-*〕」に対応すると考えられるからである。その際，*āyu-* は男性名詞であるので，「Āyu が好ましい者となった」の意であれば，*priyo* が自然である。解釈は語彙史と特殊な構文とに求められる。M. SCHELLER Vedisch *priyá-* und die Wortsippe *frei, freien, Freund* (1959) は，印欧祖語 **prih-ó-*「好ましい」が「自分に属する (eigen)」の意味でも用いられ，ケルトやゲルマン語派で「身内の，仲間の」を経て，*frei, free* に見られる形容詞

「完全な市民，社会の一員たる資格をもつ」に展開した次第を解明した。従来インド・イラン文献に跡付けられなかったこの「身内の，仲間の」という意味を仮定することが当個所に相応しい解釈を齎す。[48] 社会制度を反映するこの語義は，これにより印欧祖語に遡ることになり，従来漠然と「好ましい」と訳されてきた用例も改めて検証しなおす必要がある。[49] 構文の点では，特に法律に絡む表現に多く見られ，中性単数から成る「*idám bhū/as*」型構文「…〔の資格，権利，義務を〕得る・もっている」[50] を想定することにより，的確な理解が得られる。従って，この物語全体で重要な役割を果す *priya-* の語は中性単数で「部族の一員として遇される資格」を意味すると考えられる。

2.5. 祭式の人類への齎しを語る為に引かれる発生次第の「新学説」については注6を，Vādhūla 派の祖霊祭とその起源譚については注21を見よ。

註

1　Ṛgveda〔RV〕X 95, Śatapatha-Brāhmaṇa〔ŚB〕XI 5,1（辻直四郎『古代インドの説話』, 1978, 28–34), Baudhāyana-Śrauta-Sutra XVIII 44–45 (GOTŌ → 注4，H. KRICK Das Ritual der Feuergründung (Agnyādheya), 1982, 213–217), Maitrāyaṇī Saṁhitā〔MS〕I 6, 12:106, 1–7 (GOTŌ Münch. Stud. z. Sprachw. 39, 1980, 11), Kaṭha-Sṁhitā〔KS〕VIII 10:13,15–14,1 ～ Kapiṣṭhalakaṭha-Sṁhitā VII 6:²90, 7–15。Kālidāsa 作 Vikramorvaśīya「Urvaśī の物語，勇躍の場」を始め，Veda 以降の文学にも題材を提供した。辻31–33参照。

2　以下，Anvākh（または VādhAnvākh）と略す。これまでに知られていた資料については W. CALAND が AcOr 1 (1922)–6 (1928) に4部に分けて紹介し検討を加えている：Kleine Schriften (1990) 268–541; 更に cf. M. WITZEL StII 1 (1975) 75–108。井狩は既知の諸写本の基に想定されていた（WITZEL 同所 77は AD 1500 頃を想定）"K_1" を発見し，Anvākhyāna の全貌が初めて学界に提供される見込みとなった。研究・公表の迅速な進展が待たれる。

3　Y. IKARI "A Survey of the New Manuscripts of the Vādhūla School — MSS of K_1 and K_4", Zinbun 33 (1998〔1999〕) 1–30。Appendix (18ff.): Anvākh I 1–7。

4　T. GOTŌ, "'Purūravas und Urvaśī' aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākhyāna (Ed. IKARI)", Anusantatyai. Fs. Narten (2000) 79–110 (99–110 は

Baudh. 版の訳・注)。本稿では一部解釈に改良を加えた。本稿の主要部分については2001年6月30日の日本印度学仏教学会(東京大学)で口頭発表した。

5 Taittirīya-Saṁhitā〔TS〕I 7, 1, 3p *sárvena vái yajñēna devā́ḥ suvargám̐ lokám āyan* を基にした議論と考えられる。ただし,*iti* による Śruti の直接引用ではない。*suvar°* は Taittirīya 派の語形,他派の Text では *svar°* (→注25)。以下物語は *sárva-*「完全な」を *kl̥pta-*「整った」と置き換え,整った祭式に不可欠な祭火としての Agni の地上への招来を主題として展開する。物語を背後で導くのは神々の企みである(→**2. 3.**)。P-U物語は各版とも Agnyādheya (Śrauta 祭火設置祭)に関説し,祭火の地上への招来を語る因縁譚である。Vādh. 版のこの物語は末尾(§ 10)にも TS を引用し,その解釈(Mīmāṁsā)を以って締め括られる。始めの欠損部分には,*teṣām* から判断して *manuṣyāḥ* と *devāḥ* の語が予想される。井狩は KauṣBr I 1 *asmin vai loka ubhaye devamanuṣyā āsus. te devāḥ svargaṃ lokaṃ yanto 'gnim ūcuḥ* を参考として指摘している(2001年6月私信)。——Veda 散文の特色として,代名詞が文頭に置かれ文意を繋ぐ Syntax 上の役割を担っているが,以下,訳文では,日本語として多少不自然な場合にもできるだけ愚直に訳出する方法を採った。

6 Puruṣa-Sūkta (RV X 90) の Puruṣa → Virāj → Puruṣa の展開を思わせるが,ここでは,男性が娘に入って孫息子に生まれ変わる「隔世遺伝型」近親発生過程と,同じく女性(先行する過程の「娘」)が息子に入って孫娘に生まれ変わる過程とが交互に組み合わされている。始めの中性名詞 *manas-*「思考」は男性の位置に入っている(Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa などに見られる *sāman-*〔n.〕と *r̥c-*〔f.〕とによる生殖展開説と同様,文法に制約された結果で,中性名詞も生物的男性の役割を果たしていると考えられる)。〔創造讃歌 RV X 72 における Aditi → Dakṣa → Aditi については,別稿「人類と死の起源」(北條記念論集)参照。〕

7 同型二文が二つの *ha* によって軽い対比関係で結ばれている。DELBRÜCK Altindische Syntax (1888) 498 に補うべき例。

8 *icchantau ceratur* は「捜し続けた」(Part. Präs. +*car* による構文)とも解釈できる。訳に挙げたように解釈する場合には,*car*「進む,動く,遍歴する」と *vraj* (Loka から Araṇya へと;荒野を)「歩み行く,さすらう」との間の語法の相違に注目すべきである(→**2. 2.**)。

9 *abhi-dadhyau*, cf. BaudhŚrSū XXVIII 44:396, 2 *abhi-dadhyau* :: ŚB XI 5, 1, 1 *cakame*。

10 *paraivāsa* : *parā-as* は「〔生まれた子を〕捨てる」意味で用いられる:K. HOFFMANN Aufsätze zur Indoiranistik II (1976) 431 n. 29, S. JAMISON Ravenous

Hyenas (1991) 200 n. 102。Cf. BaudhŚrSū 397, 5f. *apa-vyadh*「抛り出す」, →注15。

11 *annāda-* + Gen.: OERTEL Kl. Schr. 487–492。「神々の食べ物」とは，祭主が死後天界で享受する，自分の為した *iṣṭāpūrtá-*「祭式と布施の結果・効力」: J. SAKAMOTO-GOTŌ "Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-* 'Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten' in der vedischen Religion", Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik (2000) 475–490；阪本（後藤）純子，今西教授記念論集『インド思想と仏教文化』(1996) 862–882。→**2. 3.**。

12 Pitr̥ たちは「実家の親たち」つまり Gandharva たちであるが，背景には「祖霊」（死後上方界に生まれ変わっている祖先たち）＝Gandharva という当然の諒解がある（§ 5 に明瞭），→**2. 1.**。

13 *etām evānu devavihitim*: cf. AB VIII 14, 2（末尾），3（4回）*etām eva devānām̐ vihitim anu*「まさしくこの，神々の定めに従って」，§ 4 *anu devavihitim*, →注19。

14 *īśvara-*, *īśvaraḥ* + Inf. *-tos*: H. OERTEL Kl. Schr. 470ff.。*annādá-*, *attár-* は *ánna-*, *ādyà-*, *adyámāna-* との対比で支配層を指す：W. RAU Staat und Gesellschaft im alten Indien (1957) 34f.。

15 *nā́ma dhā*「名を定める，名をつける」と，印欧諸語におけるその対応形については G. PINAULT "L'expression indo-européenne de la nomination", Études indo-européennes 3 (1982) 15–36 参照。*āyú-* の普通名詞としての意味は「生命力に満ちた，活動的な」。Āyu は兄たち（→§ 10）と異なり短命ではなかった。Baudh. のヴァージョンでは Amāvasu と Āyu とが寿命を全うする。彼ら二人に先立って生まれ，捨てられた子の数は明示されないが（*sā ha sma jātāñjātān eva putrān apavidhyati*「彼女は生まれる度に子供たちを抛り出した〔捨てた〕」XVIII 44:397, 4），何れも短命，あるいは短命な子孫をもつ定めであった：*paryavetarātrayo bhavanti kṣīṇāyuṣo 'nye*「彼らは過ぎ去った夜をもつ（短命な）者たちとなる。他方は（既に）命尽きた者たちだ」ib. 7。

16 帰結・解説を含意する後続文の *ha*（形式上文頭の語を強調，cf. AiSynt. 497ff.）を，論理的帰結文の先頭の語を限定強調する *evá*（文全体を「…ことになる」と訳す）と区別して，「訳である」と訳した。§ 9 にも同様の文がある。

17 動詞の 2. Sg. に *āyuṣmant-* の Vok. ないし *bhagavant-* の Vok.（ved. *bhagavas*, kl. *bhagavan*，更に ved. 語形から＞ *bhavas, bhos, bho* など）を挿む文型は，最も普通の敬語表現である。

18 写本ではここに次節の第一文があらかじめ提示されて，節の交替の印となっており

(VādhŚrSū に共通する慣行), 次節の冒頭は *tasyai=dadus* と省略形で記されている。

19 Āyu は人間たちの王 Purūravas の息子であるから, 当然父の種族, 即ち人間たちの一員であるが, 母Uの親 Gandharva たちのもとで生まれた為, 神々の一員ともなった。これは「神々の定めに従って」(*anu devavihitim*, cf. § 3 注13) のことである (父の種族に属すること, にのみに懸かるとも取れる)。Urvaśī は Āyu の為に Gandharva たちに祝福を請求 (*yāc*) する資格を得, これに対して Gandharva たちは次節で自由に選べる褒美 (*vara-*) を与える。→ **2. 1.**。

20 *vaṣaṭkaravān*: hypercharakterisierter Konj. (語幹の接尾辞 *-a-* が二重に付された形)。この場合は直前の正規形 *āśrāvayān* に引かれたものと考えられる。

21 *darvihomá-* (TSp+) は, 一般には, mantra を伴わず, *darvi-* (*dárvi-*, *dárvī-*, ともに RV+) とよばれる木製の匙を用いて行われる簡単な献供で, VādhūlaŚrSū では Rājasūya における Nirṛti への米粥 (*caru-*) の献供に見られる (X 3, 32), cf. RENOU Vocabulaire du rituel védique, MYLIUS Wörterbuch des altindischen Rituals, Chitrabhanu SEN A Dictionary of the Vedic Rituals, s. v., EGGELING ŚB I 415 n., CALAND ĀpŚrSū XXIV 3, 2, HILLEBRANDT Rituallitteratur 51 (: Gṛhya 祭の Upanayana)。しかし, ここでは Vādhūla 派に特有の祖霊祭の意味で用いられている。毎月の祖霊祭では一般に炊いた米を小団子にして祖霊に供えるが (Piṇḍapitṛyajña), 同派では *darvi-* で掬った後, 団子にせずそのまま供える : 野田智子「Vādhūla Śrautasūtra に記述される Piṇḍapitṛyajña」西南アジア研究43 (1995) 39-66, 特に45-48, 59 (n. 63), 61 (特に n. 88)。この物語は Śrauta 祭式に組み込まれた同派祖霊祭の因縁譚 (神々の企み) をも意図している。Pitṛ たちへの供物は祭火へは投じられず (祭火を人間たちに譲り渡してしまった!), 従って Agnīdh 祭官による *śrauṣaṭ*「聞くがよい」の発語も, Hotṛ 祭官による献供時の *vaṣaṭ*「(Agni は) 運ぶがよい」の発語も行われない。3人称複数「ひとびとは…する」は, 近代語で「ひとは…」と, 3人称単数で表現するような場面に用いられることが多い。

22 Aor. *pra... adāta* :: Ipf. *pra... ayacchan*, → **1. 2.**。

23 *tathā vavrāja*「そのようにして (荒野を) 歩んだ」。*tathāvavrāja*「そのようにして, 歩み戻った」(*ā-vraj*) も可能と思われる (→ § 4 の始め, § 6 少し後), Simplex は § 1 に見られる (: *vrajatam*)。*ava-vavrāja* (または *avāvavrāja*) の Haplographie の可能性もある (→ 次節 § 7 の +*avāvrājiṣam*)。動詞 *vraj* の価値については → **2. 2.**。

24 前段落に 3. Sg. Perf. で語られた内容を, 起きたばかりのことを報告する Aor.

（「のだ」と訳した）によりPが自ら語っている，→**1.2.**。

25　*uv eva*：Taittirīya 派の Sandhi, 他派の Text では *v eva*, cf. *suvargam*（→注5）。

26　*kapālāni*：供物用の焼き菓子（*puroḍāśa-*）を焼く皿。Agni に献じられる８皿分の *puroḍāśa-* は原則として全ての祭式に伴う。*barhiṣ-*：Vedi（元来は客人〔神々〕を座らせる場所。祭式用具などが置かれる）に敷かれる Kuśa（Darbha）草の茎・草束を意味する集合名詞。*pavitrāṇi*：同草の茎が「清め具」として用いられる。名詞等置文（および，論理的にそのようなものが背後に前提される文）における主語代名詞の性・数（*tad/tāni/sa*）は述語名詞（*barhiṣ/pavitrāṇi/yajñaḥ*）のそれに一致する。主語はいずれも「草たち」。当節では，Pと神々の科白が対称的になっていないが伝承のままを再現した。相手のことば，その一部（ないし文型）を繰り返してから自説を述べるなどのルールが背景にある可能性も考えられる（例えば創造讃歌 RV X 72 の「しり取り歌」的輪唱形式の問答参照〔→注６〕）。

27　インド菩提樹（イチジク属）は，他の樹上に発芽し（天からの降下），その木を覆って成長する「絞め殺しの木」の性質をもつ：MS I 6, 12p:106, 6 *aśvatthá- ārohá-*「寄生木であるインドボダイジュ」。若芽の赤さは火を連想させるものと思われる：KS VIII 10p:93, 18- *sa vr̥kṣasya śākhāyām agnim āsajyāyunā grāmam abhyait. sa punar aimīty. ed vr̥kṣasyāgre 'gniṃ jvalantaṁ. so 'ciked ayaṃ vāva so 'gnir iti*「彼は樹の枝に（火鉢 *ukhā* に入れた祭）火を掛けて Āyu を連れて村落へ向かった。『それでは私は戻ってこよう』〔と彼は思った〕。〔彼は〕ところが，樹の先端に火が燃えているのに〔出合った〕（→**1.4.**）。彼は気づいた，『これが例の火なのだ』と」。インド文献におけるアシュヴァッタについては M. B. EMENEAU "The strangling figs in Sanskrit Literature" (1949), Sanskrit Studies (1988) 11-27 に詳しい。

28　*tat satyam*：「その通りである」とも解釈できるが，*satya-* は「常に実在する」，つまり「現実にいつもある」（いつでも祭火を取り出すことができる），あるいは，「実現する」（それを用いて祭式を行えば結果を齎す），という重い意味で用いられているように思われる。T. GOTŌ "Zur Lehre Śāṇḍilyas" (Langue, style et structure dans le monde indien. Centenaire de Louis Renou, Paris 1996〔1997〕71-89) 76f. (: 'fortwährend bzw. ewig existent', 'zu verwirklichen, sicher zu realisieren'), 後藤敏文「サッティヤ *satyá-*（古インドアーリヤ語「実在」）とウースィア *οὐσία*（古ギリシャ語「実体」）—インドの辿った道と辿らなかった道と—」(『「古典学の再構築」ニューズレター』第９号，2001，26-40) 33ff. 参照。

29　Cf. IKARI, Ed. 同所に対する n. 90。この Anvākh の筋に必要な３つの mantra

《*urvaśy asi*》，《*purūravās*》，および《*āyur asi*》は（*āyur asi* の *ā* を除いて）省略されておらず，ŚrSū. の中身を *eva... ādadīta* と言い換えて，以後の（本物語には必須でない）部分を省略している。

30 Cf. *áṅgāpárūṃṣi*「手脚の諸部位と関節間の部位たち」TS II 5, 6, 1p。*párvan-*（本来「関節」）は，ここでは「関節から関節までの部分」，cf. HOFFMANN Aufs. 332。

31 Vādhūla 派は，一つの行作に対して長い mantra（または一連の mantra，ここでは3つ）を引用する場合，先ず mantra の冒頭（pratīka），または最初の mantra，を挙げた後，行作を述べ，その後 mantra の残りの部分（または後続する mantra）を挙げる：CALAND Kl. Schr. 279，辻『現存 YV 文献』31および n. 285（p. 125，文献の呈示あり），IKARI Zinbun 30（1995）103ff.。

32 Daśahotṛ については KRICK Feuergründung 287 n. 719 参照。Daśahotṛ の mantra は *vyācaṣṭe*「解説する；〔具体的に〕述べる，挙げる」という動詞で表現される（「唱える」と訳した）。10人の Hotṛ を（同定し）個々に紹介・任命するという観念が基にあったものと思われる。

33 *agnir*+ *devabhagavān*：神々の取り分を地上から神々のもとへ運び，神々からの幸運を地上に齎す火，つまり「神々と人間たちの両方の食物を食べる」祭火，と解した，→ **2. 3.**。写本に基づく読み *agnidevabhagavant-*「尊い火の神」は新しい語形成の印象を与える，cf. *śrībhagavant-*「栄光あるお方」（BhagGītā），*śrīkṛṣṇabhagavant-*「栄えあるクリシュナ神」（後代の Up.）。Āyu は他版では「神々と人間たちの両方の食物を食べる」人間たちの祖である。

34 Sūtikāgni（または Sūtakāgni，12日間点灯される：HILLEBRANDT Rituallitteratur 44f.），火葬の火，および Garbhādhāna/Caturthīkarma の火（初潮ないし結婚後4日目に男児の受胎を祈願して行われる儀礼，cf. P. V. KANE History of Dhśās. II-1 201ff.）が（何れも Gṛhya 祭火として）意図されていると思われる。

35 Aorist の確認の用法（Konstatierung）に由来する。これが中期インドアーリヤ語の過去形の基になっている。Cf. GOTŌ Fs. Narten 98f., n. 70f.。

36 特に M. WITZEL Dialectes dans les littératures indo-aryennes（éd. CAILLAT, 1989）139ff. 参照。

37 Jaiminīya-Brāhmaṇa の同様の語法について，CALAND Versl. 1914〔1915〕20 は Ipf. が神話的語りのテンスに，Perf. が歴史的語りのテンスに用いられる傾向を指摘している。WITZEL StII I（1975）94 は VādhAnvākh と JB とについて，Ipf. を神々について用いられる古風ないしは古風を装った文体であると指摘している。Cf. GOTŌ Fs. Narten 97。祭式学者が枠組みの呈示等に Ipf. を用いるということは，

窮極的には Ipf. のもつ「遠い過去を表わす」機能に帰着する。

38 Perf. であれば **abhyavājigāṃsāñ cakāra* が求められる, cf. § 3 *janayāñ cakāra*。

39 Cf. "Zwangsläufigkeit des Brāhmaṇa-Stils" HOFFMANN Aufs. 79, 92, 100, 156f., 182。

40 Suppletion 一般については H. OSTHOFF Vom Suppletivwesen der indogermanischen Sprachen (1899), WACKERNAGEL-DEBRUNNER AiG II-1 16 (文献の呈示あり), A. BLOCH Zur Geschichte einiger suppletiver Verba im Griechischen (Diss. Basel 1940), 語根 *ay/i* に関する現象については T. GOTŌ "Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen", Serie 1 (国立民族学博物館研究報告 15-4, 1990, 987-1012) s. v. の該当個所を参照のこと。

41 現在語幹 *pra-yaccha-* (原意は「差し出す」: 語根 *yam*「(両腕を) 伸ばしたまましっかりと保つ, 動かさない」) は他の時制・派生においては (*pra-*)*dā* に補完される (*paśya-*「見る」:: *darś/dṛś* に似るが, *dṛś* は現在語幹を持たないのに対し, *dā*, *pra-dā* はそれ自身現在語幹 *dadāti* をもつ), cf. Pāṇini VII 3, 78, DELBRÜCK AiSynt. 274, WACKERNAGEL-DEBRUNNER AiG II-1 16。

42 Cf. K. HOFFMANN "Das Kategoriensystem des indogermanischen Verbums" (Aufsätze II 523-540) 538, 後藤敏文「インド・ヨーロッパ祖語における動詞表現の諸カテゴリー —枠組み再建のスケッチ—」(『文化の基礎理論と諸相の研究』岩手大学人文社会科学部総合研究委員会, 1992, 99-121) 110; さらに, AiSynt. 302ff.。

43 *janⁱ* の本来の意味は「〔父親が子を: Akk.〕作る」(facientiv-transitiv)。現在語幹は *jánati* (RV), *janáyati* (RV+: 本来 Kausativ 語幹で, *jánati* を代置・明瞭化したもの) である。*janáyati* は更に「(女が) 〔子を: Akk.〕産む」意味でも用いられる: 例えば § 3 *pitṛṣu imañ janayāni* (Konj.)。「(子が) 生まれる」意味 (fientiv-intransitiv) では *jā́yate* が用いられる。何れの動詞語幹も印欧祖語に遡る。Cf. T. GOTŌ Die "I. Präsensklasse" im Vedischen (1987, 1996) 145-147, "Überlegungen zum urindogermanischen 'Stativ'" (Berthold Delbrück y la sintaxis indoeuropea hoy. Actas del Coloquio de la Indogermanische Gesellschaft, Madrid 1994, 1997[1998], 165-192) 167 n. 6。

44 更に, GOTŌ Fs. Narten 85 n. 19 参照。語幹 *vi-jā́yate*「お産をする」が何に基づいた語形であるかは不明である。「(母親が) 〔子を: Akk.〕産む」意味 (facientiv/fientiv-transitiv, 絶対用法も) の本来の動詞は *savⁱ/sū* (*sū́te* RV+) であり, その二次的な現在語幹 *sūyate* (fientiv に多い *-ya-* 語幹を採用) は Veda 文献には現れず (Ep. Kl. Pur. に在証), これへの類推形とは考え難い。あるいは, 「分娩」のよう

に，*「誕生（[：*jā́yate*] ＝出産）によって（胎児から）離れる」意味の fientiv 語形として成立したものか（？）。

45 法典等に言われる「ガンダルヴァ婚」の名の由来にもどこかで連なるものがあるかも知れない。

46 もったいぶった言い方の可能性も考えられるが，この物語の簡素な表現と合理性とにそぐわないように思われる。

47 例えば Aśoka 王の王妃に見られる。

48 対立概念は *arí-*「(敵対する・緊張関係にある *ārya-* の一）部族の成員」，*áraṇa-*「よその，よそ者」。後者は元来 *nítya-*「うちの」の対語，cf. *Allo-broges*「境界の外の者たち」:: *Nitio-broges*「境界のうちの者たち」(『ガリア戦記』に見られるケルトの部族名。*madhyameṣā́-*, *akró-polis*, *medio-lānum* タイプの複合語。前肢となる部分・場所の形容詞が後肢となる実体詞の中の部分を限定する：「ながえの中央」，「ポリスの中の高い部分」，「平原の中央部：ミラノの古名」; cf. AiG II-1 254)。*áraṇya-* n.「原野」（人の生活・文明領域外の原野，森林，荒野など）は *áraṇa-* からの派生語：＜「よそに属するもの，よその土地」。

49 RV V 85, 8 *ádhā te syāma varuṇa priyā́saḥ*「その上で，Vよ，我々は君の〔部族〕仲間（*priyá-*）でありたい」; VII 88, 6 *yá āpir nítyo varuṇa priyáḥ sán* | *tvₐā́m ā́gāṃsi kr̥ṇávat sákhā te*「身内の（*nítya-*）仲間（*āpí-*）で，Vよ，部族に属する（*priyá-*）〔仲間〕でありながら，君の同僚（*sákhā*）として，君に対して（諸々の）過失をなすことになれば」; JB II 441:8 *sā hovāca nāham etāvad apriyā devānāṃ*⁺ *gā avidaṃ* ⁺*yat tad vo*⁺ *'śnīyām*「私は君たちのそれを食べられるほど，それほど〔神々の〕裏切り者（*apriya-*）として，神々の牛たちを見つけたのではない」（Saramā の言）。後代の複合語 *devānāṃ-priya-* の背景に関わる可能性も否定できない，cf. M. HARA "A Note on Sanskrit Phrase devānāṃ priya-", IL 30 (Katre Vol. II), 1969, 13–26。

50 K. HOFFMANN "Ved. *idám bhū*", Aufsätze zur Indoiranistik II 557–559: *idám*（± *kṣatrám*, *rāṣṭrám*）*bhū/as*「この（地上の）支配権を得る・持っている」（Avesta に対応あり；HOFFMANN によれば *idám* は主格）。*satyám*, *ánr̥tam*, *yáśas*, *r̥ṇám*, *vratám*（殆どの場合中性単数）＋ *bhū/as* など多くの用例が見出される。

（本稿は2001年度文部科学省科学研究費特定領域A「古典学の再構築」の助成による研究成果の一部である。）